二極性原理：諸科学の統一のための神学に向けて
The Principle of Polarity: Towards a Theology of the Unity of Sciences

Theodore Shimmyo, Ph.D.
（神明忠昭）
Senior Research Fellow, UPF International
Tarrytown, NY, USA

序論

神と世界は、創造主と被造物としての原則的な違いはあるが互いに似ている、と多くの人々がいうのを、長年の神学研究から認識するようになった。これは、神と世界の統一、「啓示」神学と「自然」神学の統一、神を取り扱う科学である神学と被造世界を取り扱う他の科学との統一に希望を与える。又、最終的には諸科学全般の統一にも希望を与えるものと確信する。

神と世界の相似性は、既に聖トマス・アキナスの神学の中で「類比的」関係 (“analogical” relationship)という言葉によって説明されている。トマスによれば、無限の神と有限の世界の間には、非連続性がある半面、被造世界はその原因たる創造神から出て来たものだという因果関係からして、連続性もあるという。しかし、神と世界の間に非連続性と連続性の両方があるというのは、トマスが呼ぶところのアナロギア (analogia)、即ち、類比的相似性というある限定された相似性しかない、ということになる。それは相似性ではあるが、「純粋現実態」(pure act) たる神と、「現実態」(act) と「可能態」(potency) から成る世界との間に大きな差異があるために、未だにある限定された相似性なのである。このモデルによれば、神は完全に実現された神として、何ものも必要とせず、何の痛みも感じることなく、不変であるが、世界は未だに可能性の状態にあり、何かを必要とし、痛みを感じることができ、可変なのである。これでは、神と世界の真正なる統一も、また諸科学の真正なる統一も、非常に困難であると思われる。

しかしながら、神と世界の間には、より以上の相似性があると認めるもう一つの伝統があることにも気がつく。それは、神と世界は、構造的に二極性あるいは二性性相という共通したものを持っているので、構造的に相似しているというのである。この伝統はトマスのように、「純粋現実態」のみとしての神と、「現実態」と「可能態」の二極性から成る世界との間に鋭い区別をするとは違って、世界と同じように神の中にも二極性原理を見出し、神と世界の鋭い区別を構造的に乗り越えようとする伝統なのである。アルフレッド・ノース・ホワイトヘッドはこれを dipolarity (二極性) と呼び、それが神の中にも世界の中にもあるといった。統一思想では「二性性相」(dual characteristics) と呼ぶ。

この構造的二極性は、神と世界の真正なる統一、世界の違った部分どうしの真正なる統一、延いては諸科学の真なる統一を成すために、非常に役立つ手段として機能するようである。当論文の目的は、神にも世界にも見出せる二極性の構造的類似性による諸科学の統一の神学的モデルを探索するところにある。

第一節では先ずトマス・アキナスのモデルを取り扱う。次に第二節では、神学を含めた諸科学で理解されている、二極性原理による神と世界の構造的相似性について取り扱う。第三節では、二極性による神と世界の構造的相似性が、如何にして神と世界の真なる縦的統一、および世界の違った部分どうしの真なる横的統一をもたらすことができるのか、を述べる。第四節では、第三節で学んだことから、諸科学の統一のための論証をする。このようにして到達できる諸科学の統一を「境界なき」(without boundary) 諸科学の統一と呼ぶが、これは「学際的」(interdisciplinary) 統一といったもう一つの種類の諸科学の統一よりも本質的な統一である。

第一節　トマス的モデル

アリストテレスの伝統に従って、トマス・アキナスは神と世界を鋭く区別し、「純粋現実態」(pure act, actus purus) たる神は、「現実態」(act, actus) と「可能態」(potency, potentia) の合成体ではなく、完全に実現されていて、何物をも必要とせず、不変であり、無限であるが、世界の全ての実体物は、各々「現実態」と「可能態」の合成体であり、完全なる実現からは程遠く、何物かを必要とし、可変であり、有限であるとする。(1)　このように、世界全体が、「形相」(morphē) と「質料」(hylē) の合成体、即ち「現実態」と「可能態」の合成体から成るという「質量形相論」(hylomorphism) は、神には当てはまらない、というのである。二極性原理は世界だけに当てはまり、神には当てはまらないということで、神はそれから免除されているわけである。

この一貫しない二極性原理の当てはめ方ゆえに、キリスト教でのアリストテレス的伝統にいる人々は、神と世界の真の相似性も統一性も理解することができなかった。神と世界の間の真の相似性がないというのは今述べた一貫性のなさからして自明のことであるが、もっと深刻な問題は、この一貫性のなさゆえに、神と世界の間には真の統一の関係もないということになってしまうことである。何故ならば、「純粋現実態」としての神は、完全に実現されていて、何物をも必要とせず、不変であり、自己充足的であり、何物によっても影響されないので、世界とは何の関係も持つ必要がないからである。神は世界との関係を持つ決断をしたとしても、その世界からは全然影響されることはない。神は不動なる動者 (Unmoved Mover) なのである。

勿論、トマスは神と世界の間に全く相似性がないとは信じていない。(また完全なる相似性があるとも信じていない。)　その理由は、世界が実際、神より創造されたので、少なくとも何らかの相似性があり、それが神と被造物の間のいわゆる「類比的」(analogical) 関係を保つからであるという。しかし、この「類比的」関係は緊密な関係とは程遠く、未だに神と被造物の間には深い溝を持つ。トマスによれば、人間と神に共通な属性である「賢い」という言葉を使うに当たっても、その属性は人間が創造主から受けたものではあるが、人間の場合はそれが部分的にしか実現されておらず、神の場合のみ完全に実現されているのである。(2)　これは、人間が「現実態」と「可能態」の合成体としての被造物であり、完全に実現されてはおらず、「純粋現実態」としての神のみが合成体ではなく完全に実現している、と

いう上述の主張に関連している。従って、神が二極性原理から排除されている限り、神と世界の真正なる統一を見出す如何なる道もないのである。

この神と被造世界の間の深淵は、トマスの諸科学の取り扱い方においても見られる。彼によれば、科学には基本的に、先ず、行動を目的とする実践的科学と、真理を目的とする思弁的科学の二種類があるという。思弁的科学は更に、「質料と運動からどの程度に離れているかによって」、物理学または自然科学、数学、そして神学に細分化され、神学は「神の科学」または「第一哲学」と呼ばれ、質料と運動からは完全にかけ離れている「純粋現実態」としての神を対象とするので、他の科学とは全く違うものであるとされている。(3)　勿論トマスは、神学と他の科学は相互に使用できる多くの点を持っているといって、両者に何らかの統一性を見出そうとする。(4)　しかし、既に神学を他の科学から切り離す著しい基準が表明されているので、それは口実のように聞こえるようだ。

これは、トマスが神学を更に二つのタイプに分類する時も同じである。彼によれば、神学という科学は、「神に関する事柄をその主題としてでなくその原理として考慮する」タイプの神学と「神に関するこれらの事柄それ自体を主題として考慮する」タイプの神学、即ち、「哲学者が求める種類の神学」と「聖書に伝わる種類の神学」の二つのタイプがあるという。(5)　換言すれば、第一のタイプの神学は、創造された自然世界を先ず観察することによって、その背後にある神に関する事柄を最終的に知るが、第二のタイプの神学は、自然世界の仲介がなく、我々に直接啓示される神に関する事柄を取り扱う。前者のタイプの神学は、自然科学と全く同じように世界を観察するので、自然科学と実際は同じであり、キリスト教信仰がなくてもよいので、異邦人でもできる神学である。それに比べて、後者のタイプの神学は、神の啓示を受けるための信仰を必要とするので、キリスト教信仰者のみができる神学である。これらの二種類の神学は、後ほどの世紀にそれぞれ「自然」神学および「啓示」神学と呼ばれている。この両者は基本的にそれぞれ独立し、真実の関連性を持っていないのである。勿論、トマスは、両者の間に何らかの統一性を確立しようとして、両者は互いに矛盾しないし、自然神学は啓示神学の良き準備となり、啓示神学は自然神学を補強する関係にある、という。だから「恩寵は自然を破壊するのではなく完成させる」のであるという。(6)　しかし、これは自然神学に対する啓示神学の優越性を意味するので、両者を同等のパートナーとしては見ていない。トマスにとっては、自然神学は啓示神学の単なる「はした女」なのである。(7)

歴史の示すところによれば、16 世紀のプロテスタント改革者達は、長い間のアリストテレスの伝統を捨て、謙遜なる信仰に基く近い神人関係の中に神の超越と内在の二極性を認める聖書の伝統に戻ることによって、トマスによる「純粋形相」のみとしての神の理解を超越した。それが、キリスト教歴史のここ 500 年期間において、特に 19 世紀と 20 世紀において、神の二極性原理が出て来た理由のようである。

第二節　神と世界における二極性原理

A. 神

a) バルト的モデル

神の前に自分を謙虚に空しくすれば、神から真正なる啓示を受けるのであり、そしてこの真正なる啓示が神に関する真の情報源である、といった神学者は多い。この信仰的アプローチを採った人たちは、多分このような真正なる啓示を自ら体験したせいか、神は二極性を持ったダイナミックな神であって、トマス的なタイプの神ではないと報告している。

例えば、20 世紀の最も影響ある神学者の一人であったスイス改革派神学者カール・バルト (1886-1968) の報告によれば、神には「自由」と「愛」の二極があり、「自由」の極では神は何物からも絶対的に自由であるが、「愛」の極では神はキリストを通して下に降りて被造物を愛し被造物と共に在るという。しかも後者の極は前者の極による神の決定の結果であり、「自由」の超越性が「愛」の内在性に実現されるので、両者は関連し合っているのだという。(8)　我々はこれを、神の二極性に関するバルト的モデルと呼ぶ。

バルトによれば、神におけるこの重要な二重的区分は、「その用語、基礎、分類のあらゆる違いにもかかわらず」、また「細部に亘れば、殆ど至る所で疑問が感じられるし、また感じられるに違いないが」、「キリスト教神学的所見における一つの広範な総意」であるという。(9)　これを証明するために、バルトは数多くの例を出している。(10)　17 世紀の正統的なルター派神学者における、陰的と陽的、無活動的と活動的、内的と外的、絶対的と相対的、内在的と超越的、始原的と派生的、形而上学的と道徳的属性の二区分。古い改革派内における、非伝達的と伝達的属性の二区分。ユリウス・ヴェークシャイダー (1771-1849) による、それ自体無限な完全実体と見られる属性と霊的完全実体としての属性という二区分。デンマークのルター派のハンス・ラッセン・マルテンセン (1808-1884) の神学における、神の一体性と世界に向かう神の内部での対立性という二区分。ドイツのルター派のフランツ・フランク (1827-1894) の提案した、絶対的な神の属性と人格的三位一体の神の属性の二区分。R. A. リプシウス (1830-1892) による、神の形而上学的な属性と心理学的な属性の二区分。ヨハネス・ヴィッヒェルハウス (1819-1858) による、聖書のエロヒムとヤーヴェの名前の二区分。D. オットー・キルン (1857-1911) の提案である、「神の世界からの超越性を表す形相的 (形而上学的) 属性」と「神の意思と行動の内容と方向性を表す質料的 (倫理的) 属性」の二区分。テオドル・ヘリング (1848-1928) による、神の絶対的存在の属性と神の聖なる愛の属性の二区分。エルンスト・トレルチ (1865-1923) による聖性と愛 (近接性) の二区分などである。バルトはマティアス・ヨセフ・シーベン (1835-1888)、ユーゴー・ハーター (1832-1914)、ベルンハルト・バルトマン (1860-1938)、フランツ・ディエカンプ (1864-1943) などのローマ・カトリック神学における、神の存在性の属性と神の活動性の属性の二区分までも引き合いに出している。

オランダ改革派神学者であるヘンドリカス・ベルコフ (1914-1995) は、19 世紀において、聖書からだけでなくドイツ観念論からの影響によって、トマス的タイプの神とは「きっぱりとした離脱」をし、二極性の神に向かうようになったと見ているが、更に、次の世紀にカール・バルトがこれに沿ってなしたことを次のように評価している。「20 世紀においてのみ、主にバルトの神論を通して深遠なる変化が

あった。、、、バルトは、神の本質を厳密にキリストにおける神の啓示からひきだした。神はこの啓示において御自身を愛なる神として表されるのである。」(11)
ベルコフはまた、神の二重的区分に関するバルトの新しい教理がもたらした偉大なる影響を次のように語る。

> 神論におけるバルトのこの新しい策定は、彼の神学のどの部分よりも大きな影響をもたらした。、、、バルトに全然賛成しない多くの人々も、この点に関しては、彼を無視できないし、キリストとは切り離されている哲学者の神には戻れない。(12)

ベルコフ自身も神の二極性を、「本質」と「啓示」という神の「二側面」(two-sidedness) という言葉で呼ぶ。「本質」の側面においては神は超越的で「自由で最上で、我々を必要とはしない」が、それと同時に、神は「啓示」の側面において「御自身を啓示し被造物との交わりをする」ので内在的であり、しかもそれは前者の側面での絶対的決定から来る結果であるという。(13)
事実、キリスト教神学へのアリストテレス哲学の影響を拒絶して聖書に向かうのは、16 世紀のプロテスタント改革に始まった。プロテスタント改革は聖書における啓示を通して神を経験しようとした。だから、マルチン・ルターが隠れた神 (deus absconditus) と啓示された神 (deus revalatu) という、同じような神観を展開したのもうなずける。ジョン・カルヴァンも栄光の神と慈悲の神の二極性で神について述べた。宗教改革から 900 年も前に、聖書を愛する聖アウグスティヌスも、神は同時に高くも低くもある神であると見た。
神の二極性は多くの聖句に見出される。聖書を書いた人々は信仰者であった。だから彼らは、神が超越性と内在性の二極性のダイナミックな神であることを示す神の啓示を体験したに違いない。

> 主は言われる、わたしはただ近くの神であって、遠くの神ではないのであるか。主は言われる、人は、ひそかな所に身を隠して、わたしに見られないようにすることができようか。主はいわれる、私は天と地とに満ちているではないか。(エレミヤ書 23 章 23-24 節)

> [セラピムは] 互いに呼びかわして言った。「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、万軍の主、その栄光は全地に満つ」。(イザヤ書 6 章 3 節)

> いと高く、いと上なる者、とこしえに住む者、その名を聖ととなえられる者こう言われる、「わたしは高く、聖なる所に住み、また心砕けて、へりくだる者と共に住み、へりくだる者の霊をいかし、へりくだる者の心をいかす」。(イザヤ書 57 章 15 節)

> わたしは必ずあなたと共にいる。、、、わたしは有って有る者。(出エジプト記 3 章 12-15 節)

b) 他のモデル

しかし、神の二極性に関するバルトの公式で頂点に達した長いプロテスタントの伝統には、少なくとも一つの弱点があるようである。それは、神がたとえ「自由」と「愛」の二極性の神であったとしても、絶対的「自由」において、神は我々を「愛」さずに、完全に独りで存在することを絶対的に選択できたはずだからである。神の愛とは、単に、選択の自由によるもので、神の本質的な属性ではないようである。ユルゲン・モルトマン (1926-) も、「神は我々を愛さないことを選択することもできた」というこの論理に文句を付けて、「神は御自身が愛ゆえに苦しまれながら果てしなく愛する人々を、本当に必要とはされないのか？」と、疑問を投げかける。(14)

従って、モルトマンは、神全体が三位一体を背景にして、我々を愛する行動に携わるという、神の二極性の独自の見解を出している。モルトマンによれば、神の二極性とは、聖霊における父と子の愛の関係での両者の二極性である。十字架上で、子は、神の我々に対する愛ゆえに、父より捨てられて苦痛を体験し、そして今度は、父が、神の我々に対する愛ゆえに、子から切り離させられて苦痛を体験するという。しかし、父と子はこのような惨めさに身を任せることによって、聖霊において新しい一体化を体験するわけである。モルトマンは、神の愛の願望というものが、この全ての背後にあるといい、彼はその願望を、「他者に対する神の切望、および神の愛に他者が自由に応答するようにと望む神の切望」と定義している。(15)

アルフレッド・ノース・ホワイトヘッド (1861-1947) の神の二極性の理解も、神全体が我々に対する愛の行動に携わると説く。彼の「二極性」神論 (“dipolar” theism) は、神には「始原的」(心的 mental) 性質と「結果的」(物的 physical) 性質の二つの性質があると主張する。(16)　神の両方の性質は、「エロス」と呼ばれる神の愛の願望を中心として一体化して、世界に対する「当初の目的」(initial aim) を形成するが、この「当初の目的」とは、それぞれの創造的な「現実的契機」(actual occasion) が統一性という価値を達成するに当たって、神から (強制ではなく) 説得力をもって与えられる適切な入力である。ホワイトヘッドは神の「エロス」を「全ての可能性が実現されるのを善しとして、それを求めようとする生きた衝動」と定義する。(17)

統一思想では、神の二極性に関して、神は「性相と形状の二性性相」(dual characteristics of sungsang and hyungsang) の神であると説く。(18)　神の性相と形状はそれぞれ「被造物の内的な無形的側面の原因」および「被造物の外的な有形的側面の原因」である。それらは、いわば神の心と体である。心としての神の性相は、エドムンド・フッサールの用語を用いれば、ノエシス(noesis)とノエマ(noema)の二つの違った側面を持ち、それぞれ、その機能 (知情意) と形 (観念、概念、原則、数理的原理) を指していて、前者が主体で後者が対象である。それに対して、体としての神の形状は、全ての被造物の物質的原因なので、「前物質」または「前エネルギー」と呼ばれる。神の性相と形状はその二性性相として、本質的に異質ではないので一つになっていて、分離していない。神の性相と形状の一体化の背後には、神の愛の願望である「心情」があり、その「心情」は「愛を通して喜びを得ようとする感情的な衝動」と正義される。(19)

B. 世界

トマス・アキナスは不幸にして神を二極性原理から除外するが、被造世界においては、それを普遍的に見い出す (天使以外は)。従って、彼によれば、被造世界における各々の実体物は、「現実態」と「可能態」、「形相」と「質料」、または、内的なものと外的なものの合成体である。ホワイトヘッドも、世界において各々の現実的契機の「心的」極と「物的」極という二極性原理を見い出す。我々は、世界を観察する諸科学を通して、それを割りと簡単に立証できる。

a) 人間以外の被造世界

化学、物理学、生物学などの自然科学は、人間以外の被造世界におけるそれぞれの分野を観察することによって、普遍的な二極性原理を見い出す。

化学と物理学における観察によって、原子や分子が、外的な物質的なもの (外的側面) として存在するだけではなく、独自で固有な物理化学的な性質 (内的側面) をも持っていることが分かる。後者に関しては、ドミトリ・メンデレーフ (1834-1907) や他の人々の才能によって、「元素の周期律表」が作られた。これらの固有の性質は、原子と分子が物質形成というより高い目的を達成するために相互作用する時に、役割を果たす。このように、化学と物理は、原子や分子が外的側面のみならず、目的性に関連する固有の性質の側面をも持っているという普遍則に到達したようである。

原子と分子が、物質形成というこのより高い目的のために相互作用する時、それは、陽と陰の静電気による吸引力であろうが、「ファンデルワールスの力」(20) であろうが、いずれにせよ、吸引力のペア・システムを通してなされる。陽イオンと陰イオンは、静電気の力で互いに引き合うが、極性分子も、一つの極性分子の陽性側と他の極性分子の陰性側の相互作用を通して、静電気の力で互いに引き合う。静電気による吸引力よりもはるかに弱いのが、ファンデルワールスの力であり、それは無極性分子の相互作用に見られ、それらの分子を結合させるのである。肉眼で見えるレベルになると、アイザック・ニュートン (1643-1727) が、$F=GMm/d^2$ の公式 (F は二者間の引力、G は引力定数、M と m は両者の質量、d は両者間の距離) で 表される「万有引力の法則」に到達した。これら全ては実際、無生物レベルでの存在物の関係を司るある授受法則が存在することを示しており、その授受法則が存在物の内的側面であり、そしてその物質的側面が外的側面だと見做される。

植物と動物を取り扱う生物はどうであろうか。生物学的観察と研究によれば、植物と動物は、炭素の生化学に基づく細胞と組織の外的構造 (外的側面) であるだけでなく、生命に関する固有の性質 (内的側面) をも所有しているという。勿論、この生命に関する固有の性質は、種によって多様性と独自性が見られるが、しかし、共通性もある。例えば、全ての生体は何らかの遺伝的法則 (「メンデルの法則」など) によって遺伝する。また、全ての生体は、その環境の変化に対して調整的な対応をすることによって、通常の内的安定性を保つ「恒常性」(homeostasis) と呼ばれる性質 (例えば、光のある方向または逆の方向に向かう性質である「走光性」photptaxis) を所有する。生命に関するこれらの全ての性質は、自己保存と生存などの恩典を得る目的のために、生体が互いどおしまたは環境と相互作用する時に、その役割を果たす。このように、生物学的観察によって、全ての植物と動物は外

的構造の側面だけでなく目的志向の固有の性質をも所有するという一般的法則が見い出されたようである。勿論、動物ともなれば、生命一般よりももっと高度な本能のレベルを取り扱わなくてはならないが、しかし、本能も、動物のより高度なレベルの内的側面、即ち、動物固有の追加された性質であるに過ぎないであろう。

人間に至っては、生物学の一部門または応用科学と見做されている医学が、その身体 (外的側面) について研究する。同時に、精神身体医学、精神物理学、精神生理学などは、人間の霊的側面、即ち、人間の心 (内的側面) を取り扱う。

統一思想は、世界における性相と形状の二性性相についてかなり詳しく述べている。(21)　鉱物の性相は、互いに相互作用し合う内的な性質としての「物理化学的な機能」であるが、形状は単に「原子と分子から成る質量、構造、形態など」である。植物は、それよりも高度なレベルの性相と形状の二性性相を持ち、性相は互いに関係を持つ時の内的自律性としての「生命」であるが、形状は簡単にいえば「構造と形態を形成する細胞と組織、換言すれば植物の体」である。ここで注目すべきは、植物は、独自の、より高度な性相と形状の二性性相を持っているが、植物はまた原子と分子から成っているので、鉱物のレベルの性相と形状の二性性相をも内包しているということである。動物は、それ以上の高度なレベルの性相と形状の二性性相を持ち、性相は本能であるが、形状は「感覚器官と神経」である。動物もそれ自体の中に、原子と分子のみならず、細胞と組織を内包しているので、鉱物と植物のレベルの性相と形状の二性性相をも内包している。しかし人間は全ての被造物の中で、最も高度な性相と形状の二性性相を持ち、性相は「霊人体」であり、形状は「肉身」である。人間独自の「霊人体」は、「生心」である性相と「霊体」である形状の二性性相を持ち、人間の「肉身」も、「肉心」である性相と「肉体」である形状の二性性相を持つ。だから人間には、もう一組の性相と形状の二性性相が考えられるが、それは「生心」と「肉心」の二性性相である。また人間は「肉身」において、鉱物、植物、動物の性相と形状の二性性相をも内包する。従って、人間は「万物の総合、または宇宙の縮小体」と呼ぶばれる。

統一思想の理解によれば、植物はそれ自体の中に鉱物のレベルの性相と形状の二性性相を内包し、動物はそれ自体の中に鉱物と植物のレベルの性相と形状の二性性相を内包し、人間はその肉身の中に鉱物と植物と動物の性相と形状の二性性相を内包しているが、それは、第四節で、被造世界における科学の学際的統一を論ずる時に重要なポイントである。

b) 人間社会

人間は人文科学と社会科学によって、もっと広範に取り扱われる。文学や心理学などの人文科学は、とかく人間の利己主義的で罪深い性質を、恰もこの世界では普遍的なものであるかのように扱う。しかし、倫理学、教育学、そして時々心理学と哲学も、人間の善良で良心的な側面をも見い出して、それを養育して展開する理論を構築する。本論文では、罪深い人間の性質は、人類始祖の堕落によって存在するようになった望ましくないものであると見做し、本来の人間の性質には所属しないものと信じる。倫理学、教育学などによって観察される人間の良心的側面が、本来の人間の性質であると信じる。

人間を観察すれば、人間は個人を超えて、他人のために生きる傾向としての本性を持つ (内的側面) が、同時に、それ自体では悪ではない食料や住居などの物質的必要物をも求める (外的側面) ことが実際わかる。これは、例えば、心理学者アブラハム・マズロー (1908-1970) の「人間の必要物の階層」によって確立されたが、それによれば、自己実現と自己超越がその頂点を占め、生理的必要物がその底辺を占める。(22)　それは人間個人の中に、霊的なものと肉的なものの二極性があることの確証である。

この自己超越の傾向ゆえに、人間は、家庭レベルであろうが、共同体レベルであろうが、国家レベルであろうが、世界レベルであろうが、互いに相互作用ができる。家庭レベルでは、家庭倫理学が、夫婦関係と、親子関係や兄弟関係などの他の関係を取り扱う。社会学や経済学や政治学などの社会科学は、共同体、社会、国家、世界のレベルの人間関係を取り扱う。社会科学が、自然法則と比較できるような社会の一般的な原理あるいは法則を見い出すことはできない、とよく信じられている。それは、人類始祖の堕落によって人間関係に混沌、無秩序、闘争がもたらされたからという理由だけでなく、人間が人間以外の被造物よりも創造的であり自由であるという理由からもうなずける。

しかし、実証社会学の創始者であるオーギュスト・コント (1798-1857) などの学者は、社会現象を厳密な科学的観察をすることによって「社会法則」を見い出せるし、またこのように見い出された社会法則は社会における調和、連結、発展に関する法則であると信じる。(23)

経済学ともなると、コントの伝統以外の殆どの学者でも、経済的活動を観察することによって見い出される調和的授受の理論には、高度のレベルの確実性がある、と同意している。例えば、ミクロ経済学では、商品の相対的価格を決定する消費者と供給者の相互作用の法則が見い出された。また、例えば、Q=C+I+G+(X-M) で示される、マクロ経済学における所謂「国民所得恒等式」は、全ての当事者間の相互作用を表す (Q は所得、C は消費、I は投資、G は政府支出、X-M は輸出マイナス輸入である純輸出)。(24)

政治学は、決定権の配置と委譲に関して研究するが、それには利害の対立がよく関わるので、より複雑である。しかしこの学問は、「安定、公正、物質的富、平和」などの普遍的価値を政治的機関どうしの相互関係の目標にしようとする。(25)

これらの全ての法則は、それ自体は外的な体でしかない有形なる社会的存在物 (外的側面) が固有の性質 (内的側面) を持っていることを示す。国家や経済的団体などの社会的な存在物あるいは組織が、単なる外的な体 (外的側面) であるだけではなく、内的な性質 (内的側面) をも備えているという事実は、多くの社会科学者によっていわれていることである。例えば、アメリカの社会福音の創始者であるウオルター・ラウシェンブッシュ (1861-1918) は、社会団体は「超人格的力」(superpersonal forces) と呼ばれる内的性質を持っていると見たが、その力は、キリストに贖われれば、互いに良い影響を与え合うという。(26)　この超人格的力は、社会団体の内的側面を示していると思われる。

統一思想によれば、人間における重要な性相と形状の二性性相は、「生心」と「肉心」の二性性相である。(27)　「生心」は、愛と「他人のために生きる生活、即ち、家庭、氏族、国家、人類、そして究極的には神のために生きる生活」を中心とした真善美の価値の生活を求めるが、「肉心」は、「衣食住と性の生活、即ち、物質的生

活」を求める。統一思想はまた、全ての社会的組織、グループ、または団体を、性相と形状の二性性相を持った個性真理体として取り扱う。

第三節　縦的統一と横的統一

A. 神と世界の縦的統一

前節で見た、神と世界の二極性における構造的相似性は、二極性原理から神を免除するトマス的モデルよりももっとよく、神と世界の縦的統一を保持できる。

神の二極性に関するバルト的モデルは、「愛」において神はキリストを通して下に降り、世界を愛し世界と共に存在する、と主張し、何らかのレベルの神と世界の縦的統一をもたらすことは疑いない。バルトによれば、つまりキリストが神と世界の「接点」(Anknüpfungspunkt) なのである。そして、キリストが完全な「神のかたち」なので、キリストを信じる人間における「神のかたち」も接点となる。(28)　しかし、このモデルによって成される神と世界の統一は、神が絶対的な「自由」を以ってして我々を愛さないことを絶対的に選択することもできたので、完全な統一には未だに程遠い。

神の二極性を、父と子の二者が愛の聖霊にて一体化するものと見たモルトマンの理解は、神と世界が如何にして縦的に統一するのかに関する、独自の見解を与える。モルトマンは、この独自の見解を「三位一体的万有在神論」(trinitarian panentheism) と呼ぶ。(29)　これによれば、十字架上で父と子の両者は、神から見放された世界を神の生命に呼び戻すために犠牲となる。両者は、世界に対する神の愛ゆえに、この世界を背負うために共に働く。このようにして、世界が神の中に存在するようになる。しかし、かくして父と子は、聖霊において力強い、更新された愛の一体化を経験する。だから、世界を背負うことによって、神は逆説的に世界を制覇し、最終的には世界を父と子の一体化の聖霊の中に解き放ち、変革するのである。このようにして、神が世界の中に存在するようになる。世界の変革には、全ての個々の被造物において愛と相互依存の独特の性質が形成されるのを助ける聖霊の働きが見られる。(ここで、モルトマンは、各々の被造物の性質形成を、未だ心身統一とか形相・質料統一とかの言葉で明白に述べているわけではない。)　世界が聖霊の愛で変革されるとき、神は良いと感じる。

ホワイトヘッドの二極神論も、神と世界の万有在神論的統一を成立させる。神の始原的性質と結果的性質がそのエロスを中心に一体化すれば、それらが共に、世界における各々の現実的契機の形成のための当初の目的となる。当初の目的とは、各々の現実的契機をして、その心性と物性の二極を創造的に一体化するようにさせ、そしてそれによって、それ自体を越えた他の現実的契機の形成のために貢献できるようにさせる、神からの助長的な入力である。このようにして、神が世界の中に存在するようになる。また、世界は、神の結果的性質において物的に感じられ、そして、そのように感じられた物的データは、いづれ世界に送られる当初の目的が適切なものとなるように、神の始原的性質における「永遠の対象」と統合される。よって、世界が神に中に存在するようになる。世界からの物的デー

タが、永遠の対象と適切に統合される時、それが実現された美の価値を含んでいれば、それによって神は「楽しみ」(enjoyment) と「満足」(satisfaction) を受ける。
　統一思想は、神の性相と形状が、ために生きる神の心情を中心に完全に一体化すれば、それらは共に、世界における各々の「個性真理体」の形成のための神からの入力となる、と主張する。神からのこの入力は、各々の個性真理体をして、創造的にその性相と形状を一体化するようにさせ、そしてそれによって、各々がその二性性相の一体化ゆえに他の個性真理体と愛と犠牲で調和するようにさせる、助長的な入力である。統一思想では、神からのこの入力を「万有原力」と呼ぶが、これは「全ての被造物に与えられ、主体と対象の授受作用をもたらす力として現れる」。(30)　また、各々の個性真理体内の性相と形状の二性性相が完全一体化する時、それは「完全性」に到達するが、(31) それは、神の性相と形状がその心情を中心に完全一体化した時の神の完全性を反映するものである。この反映が、神の心情に「喜び」を与える。(32)

B. 世界における個体の横的統一

　上述した真正なる神と世界の縦的統一は、世界における神を中心とした異なる個体どうしの横的統一があれば、より広く、より深くなる。
　驚くべきことに、カール・バルトの「神のかたち」論は、人間どうしの横的関係、特に男女関係が、神のかたち -- しかもそれはバルトにとっては神の二極性 -- の反映であると述べている。この場合、神の二極性は「自由」と「愛」の二重区分を超えて、神の内部のある種のダイナミックな相互性を意味する。「神自身の存在内、圏内には対 (つい) があって、それは、真正かつ調和的な自己遭遇、自己発見であり、自由なる共存、協力であり、開かれた対面、相互性である」。(33)　これは、神のかたちの二側面が調和し一体化して、真正なる横的人間関係に実現され反映されれば、神と世界の統一が得られることを意味する。
　モルトマンによれば、父と子は聖霊の愛の中で一体化すれば、その聖霊を世界に送り、そこでは全ての被造物が聖霊を中心に横的に結びつけられるという。「生きとして生ける物は、それぞれ特殊な方法で、互いの中に、そして互いに一緒に生きる」。(34)　聖霊を中心とした被造共同体での異なった個物どうしの、この横的な愛の統一は、神の中の三位一体的愛の関係の反映であり、また、それへの参加でもある。しかも、その三位一体的愛の関係は、支配と隷属の如何なる関係をも除外する。世界が神の三位一体的生活を反映し、それに参加すれば、神はその実現を喜び安息できるが、その安息日を神の国という。

> 安息日に休む神は、被造物を「体験」し始める。被造物を前にして休む神は、この日、世界を支配するのではなく、世界を「感じる」。そして、全ての被造物から影響され触れられるようになっている神である。神は被造共同体を、自分自身の環境として受け入れる。(35)

　では、ホワイトヘッドはどうだろうか。彼によれば、神のエロスを中心としたその始原的性質と結果的性質の一体化が、世界に対して当初の目的を与えるが、その目的とするところは、各々の現実的契機がその心性と物性の二極の一体化を

通して形成されることだけにあるのではなく、多くの異なった現実的契機がもう一つの新しい現実的契機へと合生 (concrescence) されることにもある、という。多くの異なった現実的契機が全て横的に関係し合い合生して、もう一つの現実的契機となる時、美の価値が創造され、それが新しい現実的契機に対してだけでなく神に対しても、「楽しみ」と「満足」をもたらす。

統一思想も、異なった個性真理体どうしの横的な統一について取り扱う。この横的な統一は、各々の個性真理体が、それ自体内において性相と形状の二性性相の「完全な」一体化に到達した後に成される。神の性相と形状がその心情を中心として一体化した時に、「万有原力」が出て来るが、それは、各々の個性真理体の性相と形状の一体化を助長し、それから、異なった個性真理体どうしの統一をも助長する。神は、異なった個性真理体どうしのこの統一を見れば、それは心情を中心とした神御自身の内的統一を反映するので、「喜び」を感じる。(36)　それに関わった個性真理体も、同じ喜びを体験する。実に、二性性相の目的とは、真の愛を通してこのような喜びを得るところにあるのである。

第四節　諸科学の統一

諸科学の統一には、「学際的」統一と「境界なき」統一の二種類があるようである。学際的統一は、統一思想によれば、世界における鉱物、植物、動物、人間の性相と形状の二性性相が互いに重複することから、可能となる。それに対して、より重要な、境界なき統一は、第三節で見たように、神と世界の真正なる統一と、世界における異なった個物の真正なる統一をもたらす二極性原理のダイナミックスゆえに生じる。

A. 諸科学の学際的統一

a) 自然科学の学際的統一

化学、物理学、生物学などの自然科学は、それぞれの研究分野において性相と形状の二性性相を見い出す。その研究分野が全て、人間以外の同じ自然界に属しているので、自然科学が学際的統一を持つのは困難ではない。しかも、統一思想によれば、自然界においては、動物がそれ自体内に植物レベルの性相と形状の二性性相を包含し、そして植物がそれ自体内に鉱物レベルの性相と形状の二性性相を包含しているからである。従って、生化学、生物理学、物理化学などの学際的分野が自然科学の内部に容易に出現したのである。

b) 人文科学と社会科学の学際的統一

また、人文科学と社会科学の領域に属する心理学、社会学、経済学なども、その研究分野が全て人間および社会活動なので、互いに似ていることに気が付くのも困難ではない。それで、社会心理学、政治経済学などの学際的分野が容易に作られた。

c) 自然科学、人文科学、社会科学の学際的統一

理解するのがもう少し困難なのが、自然科学の領域と社会科学や人文科学の人間の領域との関係であろう。しかし、両者間には、神経心理学、社会生物学などの学際的分野が作られた。もっと実際的には、ユネスコなどの機関が、「地球の環境変化の人間的次元の問題、例えば、健康に及ぼすその影響など、に立ち向かい、そして、自然体系によって影響される持続可能性への理解を高める」ために、自然科学と社会科学の学際的協力の必要性を強く提案した。(37)　第二節で見たように、「宇宙の縮小体」としての人間が、それ自体内に、神によって創造された同じ宇宙の鉱物、植物、動物の性相と形状の二性性相を内包しているので、これは可能であり、また必要である。

B. 境界なき諸科学の統一

しかし、本当の疑問は、神学と他の諸科学との関係に関するものであろう。何故ならば、(神学の研究対象である) 神と (他の諸科学の研究対象である) 被造世界の間の、創造主対被造物という境界線は深刻な問題である可能性があるからである。

しかし、第三節で見たように、世界の中だけでなく神の中にもある二極性原理ゆえに、その境界線を超越し、神と世界の真正なる縦的統一と、世界における異なった個物どうしの神を中心とした真正なる統一が可能となる。勿論、バルト的モデルは、必ずしも真正なる統一を未だにもたらさないかも知れないが、しかし、神を二極性の神だというその信仰的な見解は非常に評価できる。また、モルトマンは、世界における各々の被造物の二極性についてはっきりと述べているわけではないが、聖霊の影響の下、各々の被造物が愛と相互依存の性質を持つようになるといっているのは、我々の議論にとっては適切であろう。

真の愛の先導者としての神の心情は中途半端ではない。それは絶対であり、被造世界のための「完全投入」である。それによって、神と被造世界の間のみならず、全ての被造物の間にも、真の愛の完全統一があるようにするためである。完全投入は完全な喜びをもたらす。完全投入によるこの真の愛のパターンは、宇宙創造の時に始まったのである。文鮮明師の言葉によれば、以下のごとくである。

> 神御自身が当初に愛の対象を創造された時、ありったけのエネルギー、即ち、その存在の 100%を投入された。これによって真の愛のパターンが確立された。換言すれば、完全投入という真の愛の伝統は、神によって確立されたの。その時点で、真の愛は宇宙の礎石となったのである。(38)

この場合、「愛の振動」が、何の「境界」も感じられない程、全ての実在を支配する。(39)

ここにおいて、音叉の喩えが役に立つであろう。音叉の二叉(ふたまた) が、ある物に打たれて振動すれば、その振動は別の音叉に伝達され、その別の音叉の二叉も振動し始める。ここに、二つの音叉の共鳴が生じ、二者の境界が除かれる。第二の音叉はその振動を第一の音叉に送り返し、共鳴がもっと生じる。喩えてみれば、音叉の二叉は神の二極性、そして各々の被造物の二極性のようなものであ

る。この喩えでは、二叉の振動は、二叉がそれぞれの叉の為に振動を繰り返すことなので、ある種の愛の自己否定を意味する。二つの異なった音叉どうしの共鳴は、神と世界の真正なる統一、そして、世界の異なった部分どうしの真正なる統一の如きものある。従って、文師によれば、「真の愛は、音叉の共鳴のよう」なのである。(40)

このように、モルトマンによる神の愛の願望、ホワイトヘッドによる神のエロス、あるいは、統一思想による神の心情は、二叉という二極の振動によって全ての実在に伝達され、全ての実在が共鳴し真正なる一体化を成すのである。

全ての実在がこのように何の境界もない統一の状態に到達すれば、神学 (神に関する科学) と被造世界を取り扱う如何なる科学との間には何の障壁もなくなり、また、世界を研究する全ての科学の間にも何の障壁もなくなる。このようにして諸科学の統一に到達するであろう。それは、神学が被造世界を取り扱う他の如何なる科学とも同等である、と感じることができる神秘的、直観的状態であろう。

しかし、これは全ての科学が文字通り同一であるということではなく、またそれゆえに、最早こんなに数多くの科学が必要ではないということでもない。それは、むしろ多様性における統一性なのである。もろもろの科学の基本的な違いはあるが、どの一つの科学を取ってみても、他の全ての科学もそれと同じこと、即ち、神の性相と形状の二性性相の振動を通して真の愛の一体化を感じて喜ぶこと、をしているのだ、と直観できるようになる。もろもろの専門家は未だに存在するであろうが、彼らはみな、各自の分野で神の雄大なる愛を証しするであろう。

脚注

(1) Thomas Aquinas, *Summa Contra Gentiles*, trans. Anton C. Pegis, James F. Anderson, and Vernon J. Bourke (Indianapolis: University of Notre Dame Press, 1975), I, 16-18.
(2) Aquinas, *Summa Theologica* I, 13, 5 (www.newadvent.org/summa/101305.htm).
(3) Vernon J. Bourke, ed., *The Pocket Aquinas: Selections from the Writings of St. Thomas* (New York: Washington Square Press, 1962), p. 37. Note here, however, that Thomas gives theology another name, metaphysics (“beyond physics”), because it can also deal with concepts such as substance, quality, being, and potency, which are in and by themselves detached from matter and motion.
(4) Bourke, 37, 151-52.
(5) Bourke, 150-51.
(6) Aquinas, *Summa Theologica* I, 1, 8 (www.newadvent.org/summa/100108.htm).
(7) Aquinas, I, 1, 5 (www.newadvent.org/summa/100105.htm).
(8) Karl Barth, *Church Dogmatics*, vol. 2, part I (Edinburgh: T. & T. Clark, 1957), 257-677.
(9) Barth, 341.
(10) Barth, 340-41.
(11) Hendrikus Berkhof, *Christian Faith: An Introduction to the Study of the Faith*, revised edition, trans. Sierd Woudstra (Grand Rapids, Mich.: Williams B. Eerdmans Publishing Com., 1986), 118-19.
(12) Berkhof, 119.
(13) Berkhof, 113-15.

(14) Jürgen Moltmann, *The Trinity and the Kingdom: The Doctrine of God* (Minneapolis: Fortress Press, 1993), 52.
(15) Moltmann, 106.
(16) Alfred North Whitehead, *Process and Reality: An Essay in Cosmology*, corrected edition, ed. David Ray Griffin and Donald W. Sherburne (New York: Free Press, 1978), 342-51.
(17) Whitehead, *Adventures of Ideas* (New York: Macmillan Co., 1933), 381.
(18) Sang Hun Lee, *Essentials of Unification Thought: The Head-Wing Thought* (Seoul, Korea: Unification Thought Institute, 1992), 2-11.
(19) Lee, 17.
(20) Named after Johannes Diderick van der Waals (1837-1923).
(21) Lee, 43-48.
(22) Abraham Maslow, *The Farther Reaches of Human Nature* (New York: Viking Press, 1971).
(23) Frederick Harrison, "A Philosophic Synthesis" (http://membres.lycos.fr/clotilde/etexts/harrison/synthesis. htm).
(24) http://faculty.uccb.ns.ca/mchoudhu/chapter21.html
(25) http://en.wikipedia.org/wiki/Political_science
(26) Walter Rauschenbusch, *A Theology for the Social Gospel* (Nashville, Tenn.: Abingdon, 1945), 110-17.
(27) Lee, 93-95.
(28) Karl Barth, *Church Dogmatics*, vol. 1, part I, pp. 238-39.
(29) Moltmann, *God in Creation: A New Theology of Creation and the Spirit of God*, trans. Margaret Kohl (San Francisco: Harper & Row, 1985), 98-103.
(30) Lee, 7.
(31) Lee, 169.
(32) *Exposition of the Divine Principle* (New York: HSA-UWC, 1996), 33-34.
(33) Barth, *Church Dogmatics*, vol. 3, part I, 185.
(34) Moltmann, *God in Creation*, 17.
(35) Moltmann, 279.
(36) *Exposition of the Divine Principle*, 34-36.
(37) John Zillman, "Bridging the Interdisciplinary Divide: Natural and Social Sciences" (http://portal.unesco.org/en/ev.php-URL_ID=26358&URL_DO=DO_TOPIC&URL_SECTION=201.html). Dr. Zillman is President, International Council of Academies of Engineering and Technological Sciences (CAETS), and serves on the Australian National Commission for UNESCO.
(38) Sun Myung Moon, "Address at the 11th World Media Conference," Moscow, USSR, April 10, 1990 (www.unification.net/ 1990/900410.html).
(39) Moon, "Mainstream of the Dispensation of God," Belvedere, Tarrytown, New York, November 19, 1978 (www.unification.net/1978/781119.html).
(40) Moon, "The Unification of the Fatherland," Unification Theological Seminary, Barrytown, New York, June 29, 1988 (http://www.tparents.org/Moon-Talks/sunmyungmoon88/SM062988.htm).